

田久貴船前遺跡

—福岡県宗像市田久所在遺跡の発掘調査報告—

宗像市文化財調査報告書

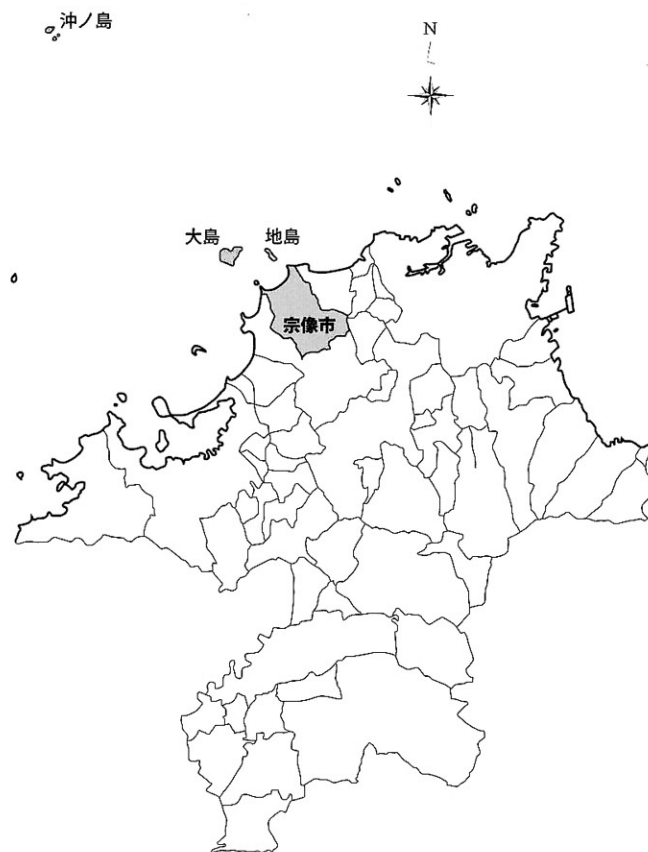
第67集

2013

宗像市教育委員会

た く き ぶ ね ま え い せ き
田 久 貴 船 前 遺 跡

宗像市文化財調査報告書第 67 集



2013

宗像市教育委員会

序 文

玄界灘に面した宗像市は、古来より大陸・朝鮮半島からの先進文化をいち早く受け取り、発展を遂げてきました。市内の遺跡からは、金銅製飾履、戟、蛇行状鉄器などの大陸・半島との繋がりを示す遺物が数多く見つかっています。

また、文化財活用の拠点施設、また世界遺産登録へ向けたガイダンス施設として平成24年4月28日には郷土文化学習交流館「海の道むなかた館」がオープンし、ゴールデンウィーク中には18,000以上もの人が来館されました。さらに、国指定史跡「田熊石畑遺跡」の整備工事も本格的に開始され、平成25年度の一部公開を目指しています。これら各事業は、市内全体を一つの大きな博物館とみなし、多くの人に本市の自然や歴史について知ってもらい、市民協働による文化財保護活動につなげていきたいとの考えからです。

さて、本書は平成22年度に実施されました「田久貴船前遺跡」の発掘調査成果をおさめたものです。今回の調査では古墳時代の集落跡が見つかりました。今回の成果報告が新たな文化財保護活動の一助になることを願います。

最後になりましたが、今回の調査全般にわたりご協力いただいた多くの方々に、心から感謝いたしますとともに、今後とも本市の文化財行政に御理解と御協力を賜りますよう心からお願い申し上げます。

平成25年3月31日

宗像市教育委員会

教育長 久芳 昭文

例 言

- 1 . 本書は平成 22 年度に国庫補助事業を受けて実施した福岡県宗像市田久 1310・1313 番地に所在する田久貴船前遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 . 田久貴船前遺跡の宗像市文化財番号は 00334 である。
- 3 . 発掘調査は宗像市教育委員会が事業主体となり市民協働部 市民活動推進課 文化財係（現市民協働・環境部 郷土文化学習交流課 文化財係）の坂本雄介、一本尚之（現伊万里市教育委員会）が担当した。
- 4 . 現地調査期間は平成 22 年 6 月 9 日～平成 22 年 8 月 18 日までである。
- 5 . 本書に掲載した遺構略号は次のとおりである。
竪穴住居：SB 土坑：SK 溝：SD 柱穴：SP
- 6 . 本書に掲載した遺構図の標高は海拔を表し、方位は特に記述がない場合は磁北である。また、基準点座標は世界測地系による数値を用いた。
- 7 . 本書に掲載した遺構実測図の作成は、坂本、一本がおこなった。
- 8 . 本書に掲載した遺物実測図の作成は、坂本、岡本格、松岡千鶴子、園田理江子、田中園子、権丈和徳（別府大学）がおこなった。
- 9 . 本書に掲載した遺構、遺物の製図は、中原美知子、藤本政晴がおこなった。
- 10 . 遺物の整理は、園田、松尾仁美、西村広子、田中園子、猪俣和代、岡原景、濱田広美、黒岩裕美子、岩本和子、廣瀬富知恵、田島圭伊子がおこなった。
- 11 . 本書に掲載した写真撮影は、空中写真を株式会社測技へ委託し、遺構は坂本、一本がおこない、遺物は坂本がおこなった。
- 12 . 本書に掲載した遺物及び実測図、写真等の資料は、宗像市教育委員会が保管している。
- 13 . 本書の執筆及び編集は、坂本がおこなった。

目次

第 I 章 序 説

1. 調査に至る経緯	1
2. 組織と構成	1
3. 調査の経過	2
4. 位置と環境	2

第 II 章 調査の記録

1. 調査方法	4
2. 遺構の調査	4

第 III 章 総 括	19
-------------	----

挿図目次

- 第 1 図 田久貴船前遺跡及び周辺遺跡位置図 (S=1/25,000)
- 第 2 図 田久貴船前遺跡遺構配置図 (S=1/150)
- 第 3 図 SB1 実測図 (S=1/40)
- 第 4 図 SB2 実測図 (S=1/40)
- 第 5 図 SB2 出土遺物実測図 (S=1/3)
- 第 6 図 SB3 実測図 (S=1/40)
- 第 7 図 SB2・3 土層観察図 (S=1/40)
- 第 8 図 SB2・3 出土遺物実測図 (S=1/2・1/3)
- 第 9 図 SB4 実測図 (S=1/40)
- 第 10 図 SK・ST・SP 実測図 (S=1/20)
- 第 11 図 SK・ST・SP 出土遺物実測図 (S=1/2・1/3)

図版目次

- 図版 1 田久貴船前遺跡全景 (上から)
- 図版 2 調査区全景 (北から)、SB1 完掘 (南から)
- 図版 3 SB2・3 完掘 (南から)、SB4 完掘 (北から)
- 図版 4 SB2・3 南北土層観察 (東から)、SB2・3 北側切合い部分 (南から)
SB2・3 西側切合い部分 (東から)、SB3 完掘詳細 (東から)、SB3 完掘詳細 (南から)
SB4 完掘詳細 (南から)、SK1 完掘 (北から)、ST1・SD1 完掘 (北から)
- 図版 5 SB2 出土遺物 (1～8)
- 図版 6 SB2 出土遺物 (9～16)
- 図版 7 SB2 出土遺物 (17～24)
- 図版 8 SB3・SK1・ST1・SP16・SP48・SP107・SP175 出土遺物 (25～32)

第 I 章 序 説

1. 調査に至る経緯

平成 21 年 11 月 13 日に宗像市田久一丁目 1310・1313 番地において、個人の農地整備を行いたいとの申請がなされた。該当地は、平成 13 年 6 月 11 日に文化財の有無の照会があり、平成 13 年 6 月 11 日の確認調査により遺構の存在が確認されていた。このことを申請者に伝え、協議をおこなった結果、記録保存の運びとなった。平成 22 年度に国庫補助を受け、記録保存目的の緊急発掘調査を行うこととなった。

なお、文化財発掘調査に係る手続きは以下の通りである。

文化財保護法第 99 条	22 宗市活第 250 号
埋蔵物発見届	22 宗市活第 447 号
埋蔵文化財保管証	22 宗市活第 454 号
発掘調査終了届	22 宗市活第 455 号

2. 組織と構成

平成 22 年度調査組織

総括	宗像市教育委員会	教育長	城月 カヨ子
		市民協働部長	伊豆丸 正敏
		市民活動推進課長	磯部 輝美
		市民活動推進課参事	清水 比呂之
		文化財係長	安部 裕久
庶務・会計		主査	判田 博明
調査担当		嘱託職員	坂本 雄介
			一本 尚之

平成 24 年度調査組織

総括	宗像市教育委員会	教育長	久芳 昭文
		市民協働・環境部長	福崎 常喜
		郷土文化学習交流課長	清水 比呂之
		文化財係長	安部 裕久
庶務・会計		主査	判田 博明
報告書担当		技師	坂本 雄介

3. 調査の経過

発掘作業の経過

発掘調査は、申請地にある樹木の伐採後にバックホーによる表土除去を行った。その後、遺構検出を行い、遺構配置図を作成するために5mグリットを組んだ。遺構配置図はS=1/100で実測した。遺構の掘削は人力により行い、適宜小型・大型カメラによる撮影を行った。遺構掘削後は完掘状態の写真撮影を行い、合わせてRCヘリコプターによる空中写真撮影を行った。ここで、調査区の境にあった住居跡の拡張調査を行った。最後に完掘状態の遺構図をS=1/20で実測し、バックホーによる埋戻しを行い現地調査を終了した。期間は平成22年6月9日～8月18日である。

整理作業の経過

整理作業は、土器の洗浄を行い、接合復元作業を行った。その後、分類、図化遺物の選択作業を行った。その後、図化、浄書作業を経て挿図完成後、写真撮影を行った。最後に図面、写真の台帳化を行った。期間は平成24年6月1日～平成25年2月15日である。

4. 位置と環境

宗像市は福岡県北部に位置し、福岡市・北九州市のほぼ中間点にあたる。北西方向を除き、孔大寺山地（四塚山地）と宗像・鞍手低山地に囲まれた盆地状地形である。本遺跡は、鞍手郡宮田町との境にある靡山（標高296.9m）から北西に派生し、盆地状地形の中央に張り出した丘陵の先端に位置し、北側直下には釣川が流れる。範囲は標高20～50mに展開している。丘陵頂部には前方後円墳2基、円墳10基を確認され、田久貴船前1号墳は全長約50mを測る前方後円墳で、前方部はやや細長くバチ形を呈す。南東約500mの位置には、田久松ヶ浦遺跡があり、縄文時代の落し穴状遺構、弥生時代の竪穴住居跡、貯蔵穴、木棺墓、土壙墓、甕棺墓、平安時代の焼土坑が検出された。木棺墓の中には、石槨墓が2基確認された。遺物は、有柄式磨製石剣、有茎式磨製石鏃、扁平片刃石鏃、石包丁、砥石、弥生土器壺、甕、高坏、須恵器、平瓦が出土した。南西約750mには曲香烟遺跡があり、弥生時代の貯蔵穴群が検出された。

参考文献

- 宗像市史編纂委員会 1997 『宗像市史』 通史編第一巻 自然 考古
竹内理三ほか編 1988 『角川日本地名大辞典』 40 福岡県
宗像市教育委員会 1999 『田久松ヶ浦』 宗像市文化財調査報告書 第47集
宗像市教育委員会 2011 『宗像市遺跡等分布地図』



第1図 田久貴船前遺跡の周辺主要遺跡分布地図 (S=1/25,000)

- | | | |
|-------------|-------------|-------------|
| 1. 田久貴船前遺跡 | 2. 田久貴船前1号墳 | 3. 田久立崎遺跡 |
| 4. 田久松ヶ浦遺跡 | 5. 田久瓜ヶ坂遺跡 | 6. 曲香烟遺跡 |
| 7. 須恵クヒノ浦遺跡 | 8. 須恵須賀浦遺跡 | 9. 三郎丸今井城遺跡 |
| 10. 光岡長尾遺跡 | 11. 久原遺跡 | 12. 久原瀧ヶ下遺跡 |

第Ⅱ章 調査の記録

1. 調査の方法

調査に先立ち、確認調査の結果から遺構の残存範囲を想定し、調査区を設定した。その後バックホーによる表土と耕作土の除去を行った。遺構検出を人力で行いつつ、遺構図作成のための5mグリットを設置した。遺構配置図に記録の終わった遺構から順次人力による掘削を行った。その後は適宜土層図の作成やデジタルカメラ・小型カメラによる半裁状況の撮影を行った。遺構掘削完了した遺構から1/20の遺構全体図の実測を開始した。全遺構掘削完了後にRCヘリコプターによる全景撮影を行い、デジタルカメラ、小型・大型カメラによる個別遺構撮影を行った。遺構全体図作成完了後埋戻し作業を開始する予定であったが、調査区の境にある2軒の住居跡の拡張調査を実施した。拡張部分調査完了後、遺構全体図への追加、各カメラによる撮影後バックホーによる埋戻しを行い、現地での調査を終了した。

2. 遺構の調査

本調査地は、上下二段の畑であり、表土より15～80cm程で遺構面にいたる。下段西側が一番浅く、東側が深い。確認された遺構は、竪穴住居(SB)、土坑(SK)、溝(SD)、柱穴(SP)、近世墓(ST)である。以下遺構及び出土遺物の詳細を述べる。

竪穴住居(SB)

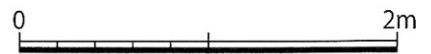
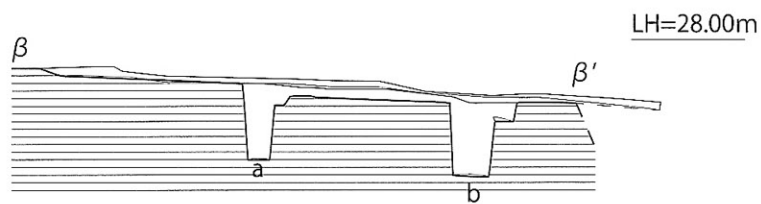
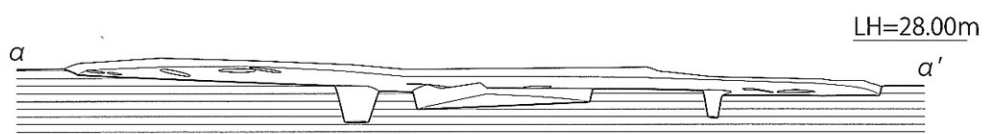
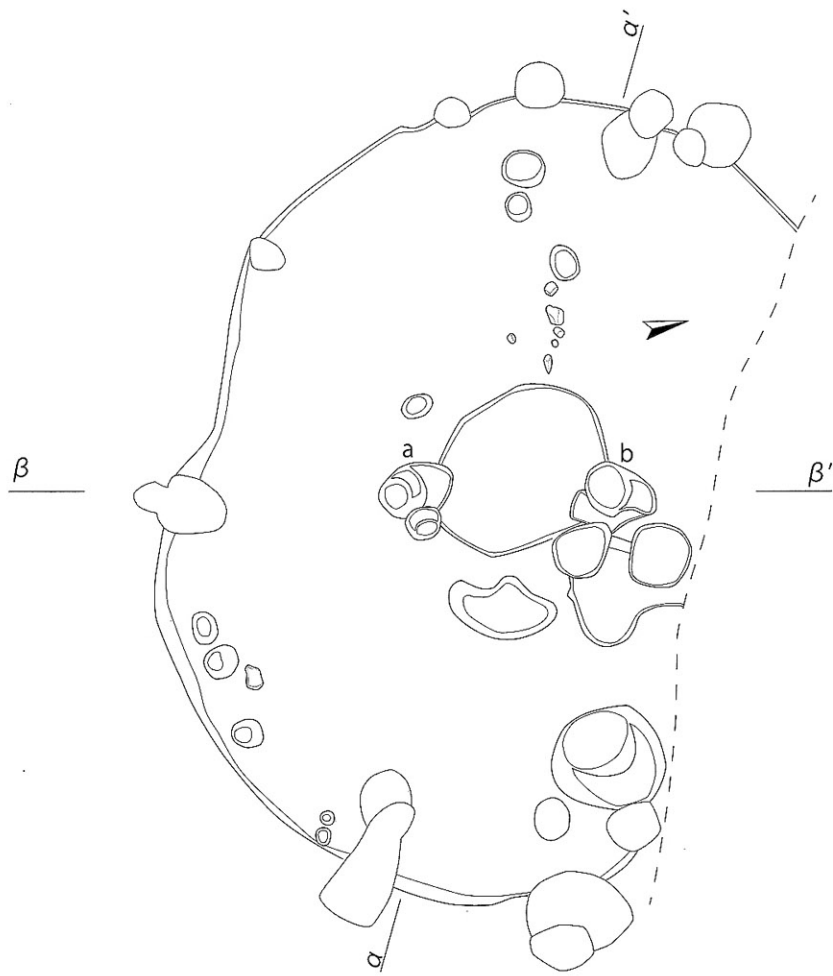
SB1 (第3図 図版2) 調査区上段中央付近で確認された。長軸径4.5mを測る楕円形竪穴住居である。残存状況がきわめて悪く、北側は段落ちにより削平され、残存する部分も深さ4cm程である。中央には長軸1m、短軸80cm、深さ5cmを測る楕円形の土坑がある。浅いために屋内土坑ではないと考えられる。支柱穴は2本で、深さはaが44cm、bが54cmを測る。遺物は弥生土器が出土したが小破片のため図示することができなかった。

SB2・3 (図版3) 調査区下段西側角で確認された。当初は円形竪穴住居として調査していたが、掘削の途中で方形竪穴住居と重なっていることが疑われた。平面プラン及び土層観察からの切り合いは確認できなかった。そのために、層序で分けていた遺物を1段目・2段目をSB2円形竪穴住居、3段目をSB3方形竪穴住居として扱うこととした。

SB2 (第4図) 直径10.4m程の円形竪穴住居である。調査区北西角にあるために詳細は不明である。深さは30cm程である。外周側はベット状に1段高くなるが、最大でも5cm前後の残存で、北東側と西側では削平により消滅している。床面からベットへの立ち上がり部分には深さ5cm程の溝がある。また、この壁溝から40cm程内側にも途中途切れるが幅40cm程、深さ8cm程の溝が巡る。支柱穴と考えられるものは4つ確認された。これを反転すると支柱穴は8本と考えられる。深さはaが28cm、bが26cm、cが44cm、dが13cmを測る。ただし、この住居のベットはSB2の拡張に伴う可能性や、別の切り合う竪穴住居の一部の可能性もある。調査区を拡張し確認をおこなったが残存状況が悪く、このことについての確証を得ることはできなかった。遺物は弥生土器高坏、壺、甕が出土した。



第2図 田久貴船前遺跡遺構配置図 (S=1/150)



第3図 SB 1 実測図 (S=1/40)

出土遺物

弥生土器

甕（第5図 図版5・6）1は口縁部の破片で、残存器高3.2cmを測る。口縁部は逆L字で、体部は僅かに外側に開きながらのびる。摩耗により調整は不明であるが、口唇部にススが若干付着している。胎土は1.5mm以下の白色砂粒を少し含み、やや粗い。焼成は良好で、内外面とも橙色を呈す。

2は口縁部の破片で、残存器高2.9cmを測る。口縁部は鋤先状で、体部は少し開きながらのびる。頸部直下の外面には断面三角形の突帯が1条廻る。調整は摩耗により不明である。胎土は1～2mm以下の赤色粒と白色砂粒を少し含み、やや粗い。焼成は良好で、内外面とも橙色を呈す。

3は口縁部から体部上位の破片で1/4程度残存し、復元口径22.4cm、残存器高5.9cmを測る。口縁端部は上方へ摘み上げ、口縁部はくの字に屈曲する。調整は摩耗により不明である。胎土は2mm以下の白色砂粒を多く含み、粗い。焼成は良好で、内外面とも明褐色から橙色を呈す。

4は口縁部から体部上位の破片で、復元口径22cm、残存器高5.7cmを測る。口縁端部は上方へ摘み上げ、口縁部はくの字に屈曲する。調整は摩耗により不明である。胎土は2mm以下の赤色粒と白色砂粒を多く含み、粗い。焼成は良好で、内外面とも橙色を呈す。

5は口縁部から体部下位の破片で口縁部1/8程残存し、復元口径24.6cm、残存器高17.7cmを測る。口縁端部は僅かに上方に摘み上げ、口縁部はくの字に屈曲する。調整は摩耗により不明だが、口縁部には微かにハケ目が確認できる。胎土は2mm以下の白色砂粒を多く含み、やや粗い。焼成はやや不良で、内外面とも褐色から浅黄橙色を呈す。

6は口縁部の破片で、残存器高3.5cmを測る。口縁部は鋤先状で、口縁部のやや下方には断面三角形の突帯が2条廻る。内外面とも丹塗りであるが、剥落しておりミガキの詳細は不明である。胎土は1mm以下の白色砂粒を少し含むが、緻密。焼成は良好で、内面は橙色、外面は赤褐色を呈す。

7は体部の破片で、残存器高6.3cmを測る。外面には断面三角形の突帯が3条廻る。丹塗りと思われるが剥落しており詳細は不明である。胎土は2mm以下の白色砂粒を多く含み、やや粗い。焼成は良好で、内外面とも橙色を呈す。

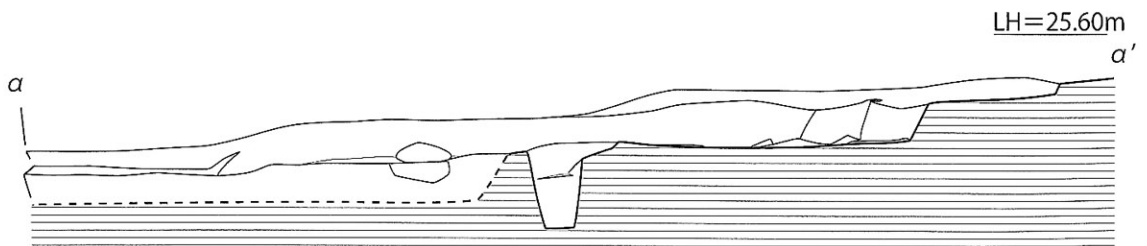
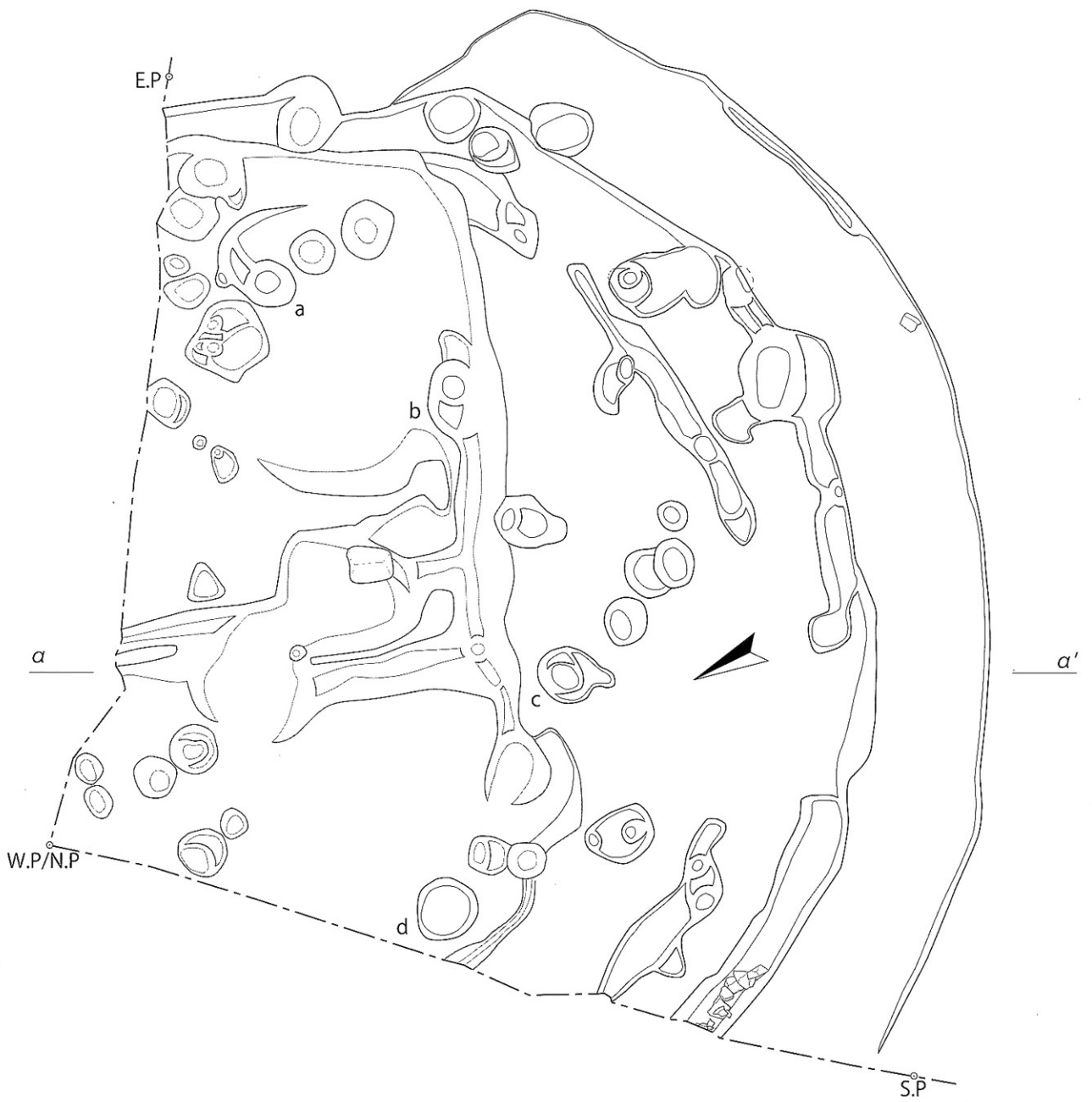
8は底部の破片で、残存器高4.3cmを測る。平底で体部はやや内湾気味に立ち上がる。調整は摩耗により不明である。胎土は2mm以下の白色砂粒を含み、やや粗い。焼成は良好で、内外面ともにぶい橙色を呈す。

9は底部の破片で、残存器高2.9cm、復元底径7cmを測る。やや上底で体部はやや内湾気味に立ち上がる。調整は摩耗により不明である。胎土は1mm以下の白色砂粒を少し含むが、緻密である。焼成は良好で、内面は浅黄橙色、外面は浅黄橙色～橙色を呈す。

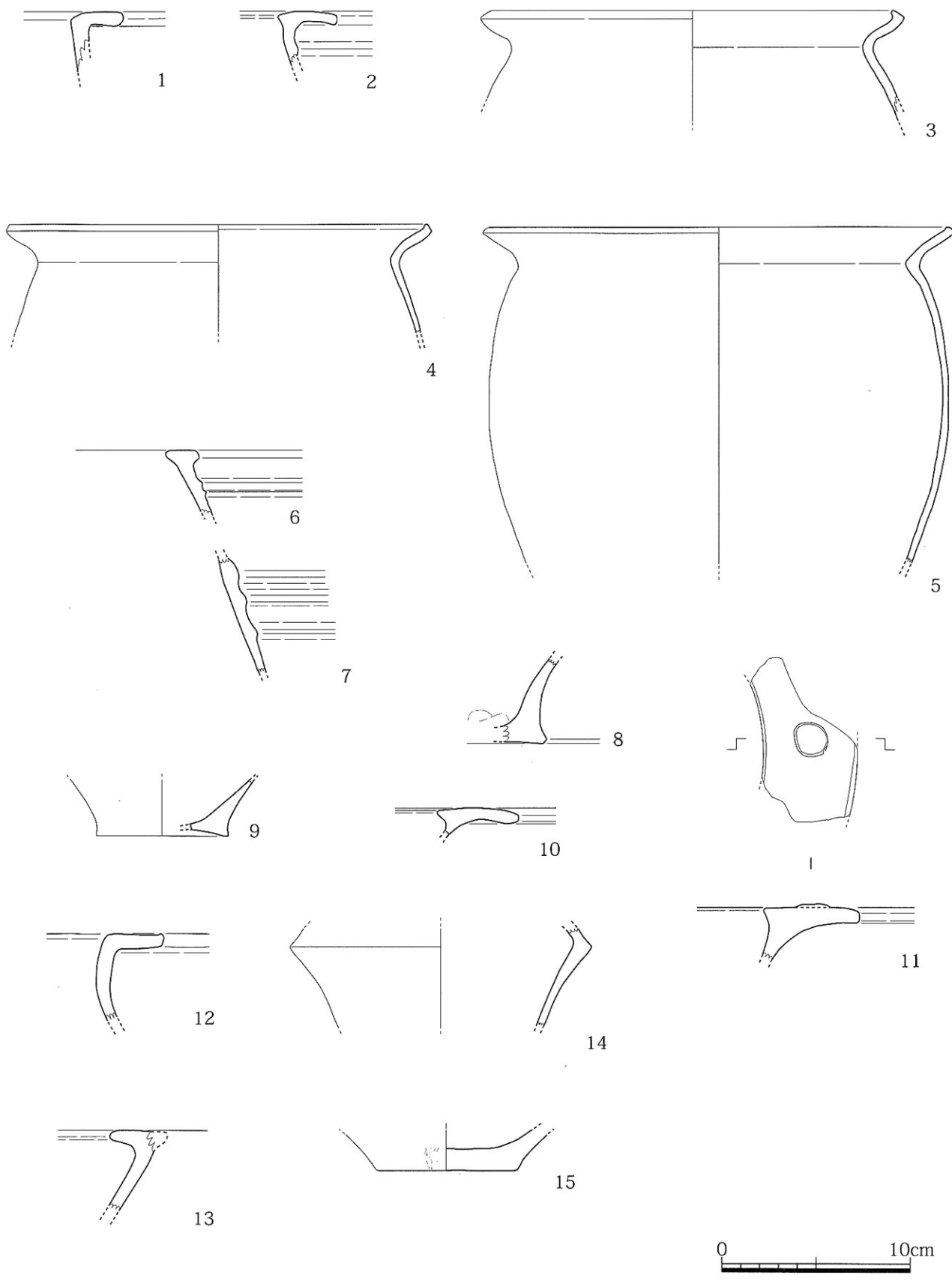
壺（第5・8図 図版6・7）10は口縁部の破片で、残存器高1.4cmを測る。口縁部は鋤先状で、端部はやや垂れる。調整は摩耗により不明である。胎土は1.5mm以下の赤色粒と白色砂粒を少し含み、やや粗い。焼成は良好で、内面は橙色、外面は明赤褐色を呈す。

11は口縁部の破片で、残存器高3cmを測る。口縁部上面には円形浮文がある。調整は摩耗により不明である。胎土は1mm前後の赤色粒と白色砂粒を少し含み、やや粗い。焼成は良好で、内面は浅黄橙色、外面は橙色を呈す。

12は口縁部の破片で、残存器高4.6cmを測る。口縁部は上面が平坦になり、端部は上方に僅か



第4図 SB 2実測図 (S=1/40)



第5図 SB2 出土遺物実測図 (S=1/3)

に摘み上げる。調整は摩耗により不明である。胎土は 2mm 以下の白色砂粒を多く含み、粗い。焼成は良好で、内外面ともにぶい橙色を呈す。

13 は口縁部の破片で、残存器高 4.4cm を測る。袋状口縁であるが、外面上部は平坦である。調整は摩耗により不明である。胎土は 2mm 以下の白色砂粒を多く含み、粗い。焼成はやや不良で、内面はにぶい褐色、外面は橙色を呈す。

14 は口縁部の破片で、復元口径 14.2cm、残存器高 4.9cm を測る。複合口縁の壺で、外面反転部には稜線が入る。調整は摩耗により不明である。胎土は 2mm 以下の白色砂粒を多く含み、粗い。焼成はやや不良で、内外面とも浅黄橙色を呈す。

15 は底部の破片で、残存器高 2.2cm、復元底径 7.4cm を測る。平底で体部は若干内湾気味に立ち上がる。外面には丹塗りの跡が確認できるが、調整は摩耗により不明である。胎土は 1.5mm 以下の砂粒を多く含み、やや粗い。焼成は良好で、内面はにぶい黄褐色、外面は赤褐色を呈す。

16 は底部から体部下半の破片で、残存器高 9.9cm、復元底径 7.2cm を測る。底部は僅かにレンズ状に膨らみ、体部は外湾しながら立ち上がる。調整は内面がハケ目、外面がハケ目後に一部でナデ消しているが摩耗していて不明瞭である。胎土は 2mm 以下の白色砂粒を多く含み、粗い。焼成は良好で、内外面との橙色を呈す。底部付近に黒斑が確認できる。

17 は底部から体部下半の破片で、残存器高 13.8cm、底径 10.2cm を測る。底部は突レンズ状の平底で、体部は外湾しながら立ち上がる。調整は内外面ともハケ目である。胎土は 2mm 以下の白色砂粒を多く含み、やや粗い。焼成は良好で、内面は橙色～褐灰色、外面は橙色を呈す。底部付近に黒斑が確認できる。

18 は底部の破片で、残存器高 2cm、復元底径 3.4cm を測る。底部はレンズ状で、体部はやや外湾気味に立ち上がる。調整は内外面ともハケ目である。胎土は 1.5mm 前後の白色砂粒を含み、やや粗い。焼成は良好で、内面は橙色、外面はにぶい赤褐色を呈す。

高環（第 8 図 図版 7）19 は脚環接合部で剥離した坏底部の破片で、残存器高 1.9cm を測る。調整は摩耗により不明である。胎土は 1mm 以下の白色砂粒を多く含み、粗い。焼成は良好で、内外面ともに明赤褐色を呈す。

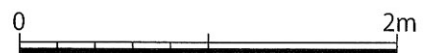
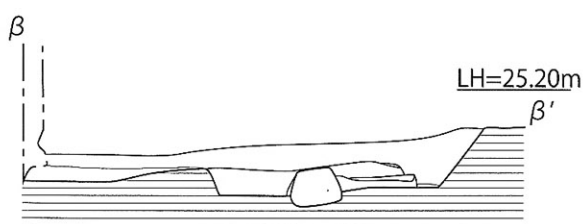
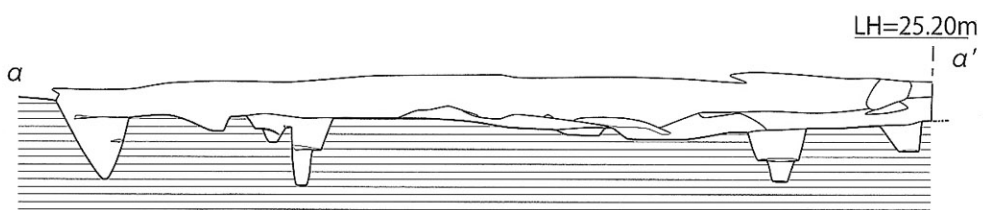
20 は脚環接合部から脚裾中位の破片で、残存器高 8.6cm、接合部径 2.7cm を測る。調整は摩耗により不明である。胎土は 2mm 以下の白色砂粒を多く含み、粗い。焼成はやや不良で、内面はにぶい褐色、外面は橙色を呈す。

鉢（第 8 図 図版 7）21 は口縁部の破片で、残存器高 2.1cm を測る。口縁端部直下に断面三角形の突帯が 1 条廻る。内外面とも丹塗りであるが、剥落しておりミガキの詳細は不明である。胎土は 1mm 以下の白色砂粒を少し含むが、緻密。焼成は良好で、内外面とも明赤褐色を呈す。

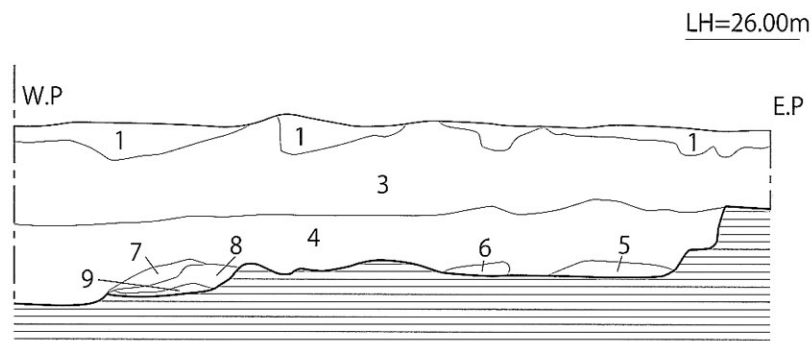
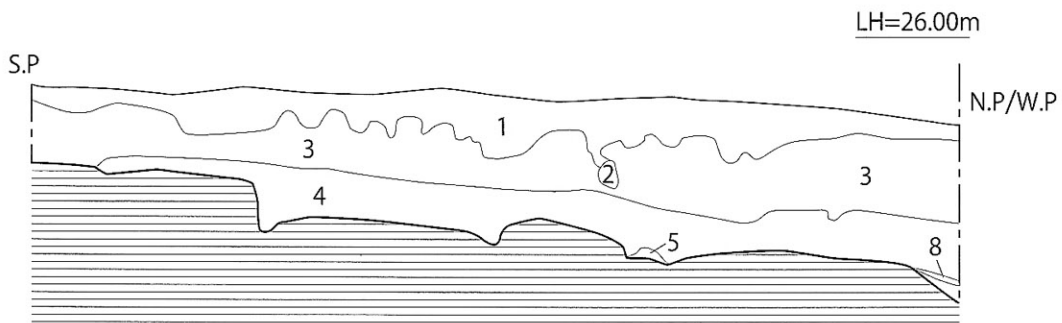
22 は口縁部の破片で、残存器高 3.9cm を測る。口縁端部の少し下方に断面三角形の突帯が 1 条廻る。内外面とも丹塗りであるが、剥落しておりミガキの詳細は不明である。胎土は 1mm 以下の白色砂粒を少し含むが、緻密。焼成は良好で、内面は橙色、外面は赤褐色を呈す。

土製品

紡錘車（第 8 図 図版 7）23 は端部を僅かに欠損するがほぼ完形で、直径 3.8cm 前後、厚さ 0.5cm を測る。中央の孔径は 0.2cm を測り、穿孔は焼成前に両側から行われている。調整は指ナデである。胎土は 1.5mm 前後の白色砂粒を少し含む、やや粗い。焼成は良好で、表面はにぶい橙色、裏面は

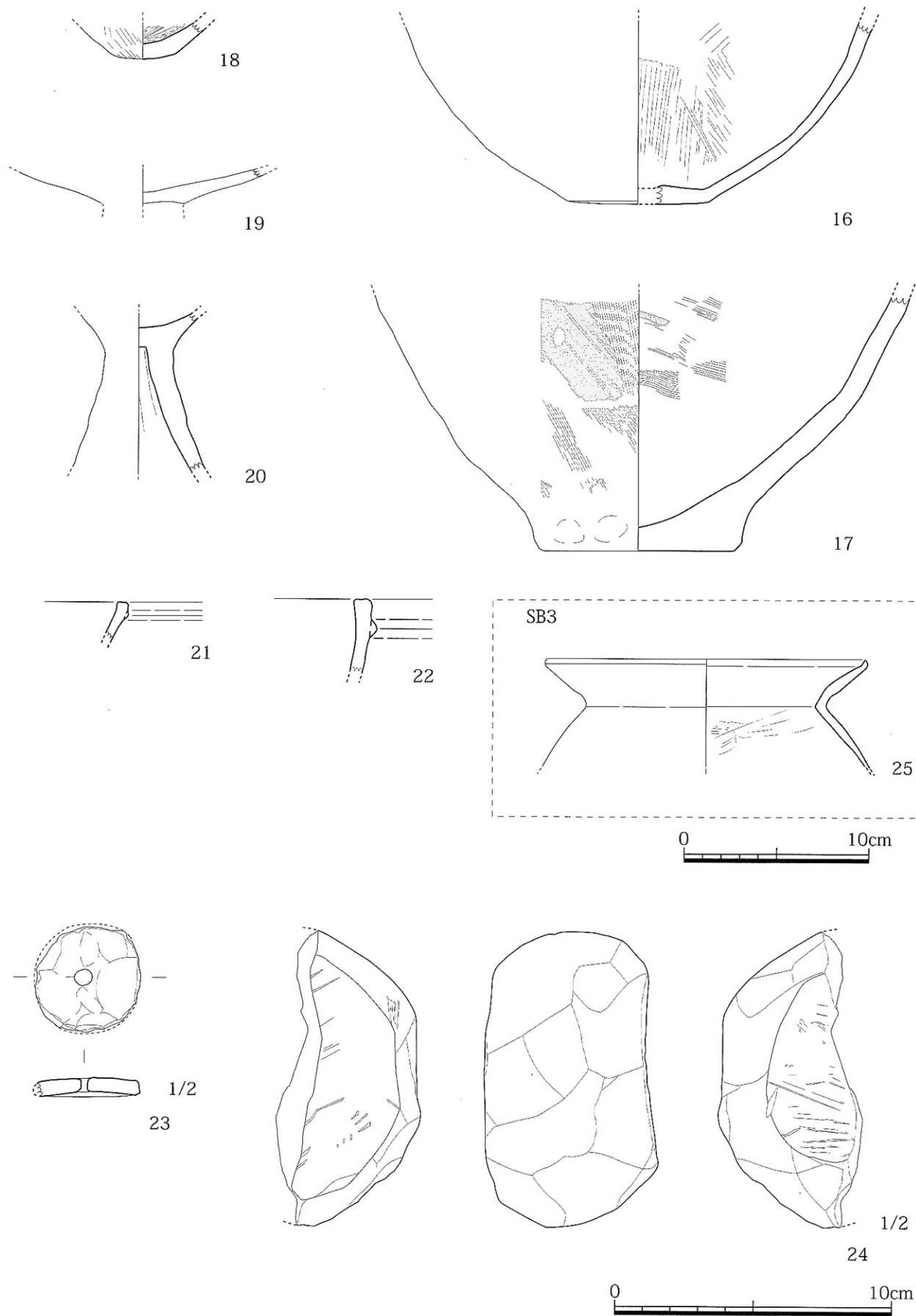


第6图 SB 3 实测图 (S=1/40)



1. 黄灰色～青灰色土（耕作土）
2. 橙色砂質土（上層から流れ込んだ砂質土のブロックで、直径1～2mmの砂粒を含み、固く締まる。）
3. 明褐色砂質土（遺物を含み、直径1～3mmの砂粒を含み、固く締まる。）
4. 暗褐色粘質土（遺物と炭化物を含み、直径1～2mmの砂粒を少量含む。粘質が強く、固く締まる。遺構埋土）
5. 灰褐色粘質土（遺物と炭化物を含み、直径1～2mmの砂粒を少量含む。粘質が強く、固く締まる。遺構埋土）
6. 明褐色土（炭化物を含み、粘質はやや弱い固く締まる。遺構埋土）
7. 暗褐色土（炭化物を多く含み、粘質はやや弱い固く締まる。遺構埋土）
8. 黄褐色土（遺物と炭化物を含み、粘質はやや弱い固く締まる。遺構埋土）
9. 暗黄褐色土（炭化物を含み、粘質はやや弱い固く締まる。遺構埋土）

第7図 SB2・3土層観察図（S=1/40）



第8図 SB2・3 出土遺物図 (S=1/2・1/3)

にぶい褐色を呈す。

石製品

石皿（第8図 図版7）24は1/3程の破片で、残存長10.6cm、幅10.7cm、厚さ6.2cmを測る。両面とも使用痕があり、欠損している中心に向かい緩やかに窪む。周囲は、意図的に割られており、使いやすいように大きさを整えたものと考えられる。砂岩製で、淡灰色を呈す。

SB3（第6図）SB2によって切られる。長軸4.85m、短軸 $2.4 + a$ mを測る方形竪穴住居である。深さは21cm程である。南辺中央にカマド状の遺構がある。ただし、被熱による赤変は確認できず、周辺埋土からの炭化物も確認されなかったためカマドとの認定は避けたい。支柱穴と考えられるものは2つ確認され、これを反転すると支柱穴は4本と考えられる。深さはaが28cm、bが27cmを測る。遺物は土師器甕が出土した。

出土遺物

土師器

甕（第8図 図版8）25は口縁部の破片で、復元口径17.7cm、残存器高5.8cmである。口縁端部を僅かに摘み上げ、頸部は器壁が厚くなり、体部に向かい急激に薄くなる。体部外面はタタキが僅かに確認でき、内面頸部下位はヘラケズリを施す。胎土は1～2mmの白色砂粒を含み、やや粗い。焼成は良好で、内面は褐色、外面は暗褐色を呈す。布留系の甕である。

SB4（第9図 図版3）調査区下段東側で確認された。長軸 $4.44 + a$ m、短軸 $2.6 + a$ mを測る方形竪穴住居である。北側は調査区外に広がり、東側は現代の溝に切られているため、完全な規模は不明である。壁溝のみと残存状況が悪く、深さは6cm程である。南側には幅64cm、西側には幅28cmのベットがある。支柱穴の数は不明である。遺物は弥生土器、土師器が出土したが小破片のため図示することができなかった。

土坑（SK）

SK1（第10図 図版4）調査区上段東側で確認された。長軸0.79 m、短軸0.3 m、深さ0.66 mを測る。埋土には炭化物が多く含まれ、壁面は熱を受けて赤変しており、焼土坑と考えられる。遺物は弥生土器甕が出土した。

出土遺物

弥生土器

甕（第11図 図版8）26は口縁部から体部の破片で、復元口径25.7cm、残存器高7.2cmを測る。口縁部は逆L字で、頸部直下には突帯が1条廻る。調整は摩耗により不明である。胎土は2mm以下の白色砂粒と茶色粒を多く含み、粗い。焼成はやや不良で、内外面とも橙色を呈す。

土墳墓（ST）

ST1（第10図 図版4）調査区下段西側で確認された。上面で長軸1.17 m、短軸0.68 m、深さ0.49 mを測る。後述のSD1を切るかたちで検出された。埋土は暗褐色土の単一で、埋土中位で白磁皿が出土した。土層を精査したが木棺の痕跡等は確認されなかった。

出土遺物

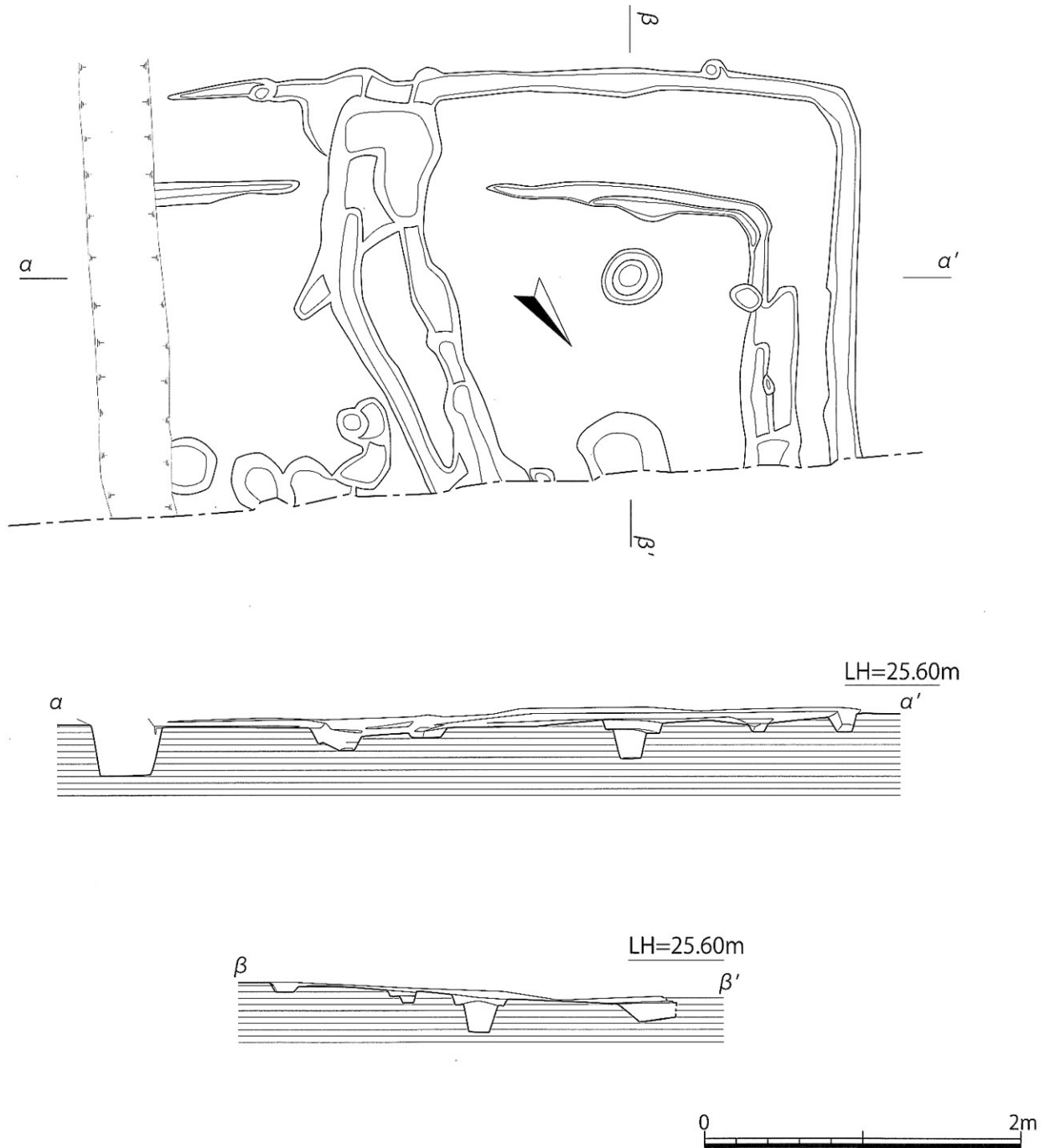
白磁

皿（第11図 図版8）27は完形品で、口径11.9cm、器高2.7cm、高台径6.8cmを測る。口縁端部はつまんで外反する。釉はごく薄い青色を帯びた透明で、粘度は強い。全面施釉後に高台

端部のみケズリ取っている。内底と外面に数か所に、ガス吹き出し跡がある。胎土は僅かに灰色味を帯びた白色で、緻密。焼成は良好で、釉に貫入はないが、高台内側には釉の割れがある。

溝 (SD)

SD 1 (第 10 図 図版 4) 調査区下段東側で確認された。西側は調査区外へと続き、残存長 3.28



第 9 図 SB4 実測図 (S=1/40)

m、幅 0.74m、深さ 5cm である。削平により詳細は不明である。遺物は弥生土器が出土したが小破片のため図示することができなかった。

柱穴 (SP)

SP 16 (第 10 図) 調査区上段南西で確認された。やや歪んだ円形で、直径 46cm、深さ 21cm を測る。埋土は暗褐色土で炭化物を含んでいた。遺物は弥生土器片と土製品が出土した。

出土遺物

土製品

紡錘車 (第 11 図 図版 8) 28 は端部を僅かに欠損するが、ほぼ完形で、直径 3.4cm、厚さ 0.9cm を測る。中央の孔径は 0.8cm を測り、穿孔は焼成前に下方側から行われている。調整は摩耗により不明である。胎土は 1.5mm 前後の白色砂粒を多く含み、粗い。焼成は良好で、表面はにぶい橙色、裏面はにぶい褐色を呈す。

SP 48 (第 10 図) 調査区上段西側で確認された。北側がやや歪んだ円形で、直径 50cm、深さ 30cm を測る。埋土は暗褐色土で炭化物を含んでいた。遺物は弥生土器甕が出土した。

出土遺物

弥生土器

甕 (第 11 図 図版 8) 29 は体部の破片で、残存器高 3.8cm を測る。残存部中央外面にはキザミ目が僅かに確認できる。調整は摩耗により不明である。胎土は 2mm 以下の白色砂粒を多く含み、粗い。焼成は良好で、内面はにぶい橙色、外面はにぶい黄橙色を呈す。

SP 107 調査区上段西側で確認された。南東側が歪んだ楕円形で、長軸 31cm、深さ 20cm を測る。埋土は暗褐色土で炭化物を含んでいた。遺物は弥生土器甕と壺が出土した。

出土遺物

弥生土器

甕 (第 11 図 図版 8) 30 は口縁部の破片で、復元口径 19.2cm、残存器高 3.5cm を測る。口縁端部を僅かに摘み上げる。体部外面にはススが付着する。調整は体部外面にハケ目、口縁部と体部内面はヨコナデである。胎土は 1mm 前後の白色砂粒を少し含むが、緻密。焼成は良好で、内外面とも浅黄橙色を呈す。

壺 (第 11 図 図版 8) 31 は底部の破片で、残存器高 2.8cm、復元底径 5.4cm を測る。底部は平底で、体部は開きながら立ち上がる。体部外面にはススが付着する。調整は体部外面にハケ目が残るが、他は摩耗により不明である。胎土は 2mm 以下の砂粒を多く含み、粗い。焼成は良好で、内面はにぶい黄橙色、外面はにぶい橙色を呈す。

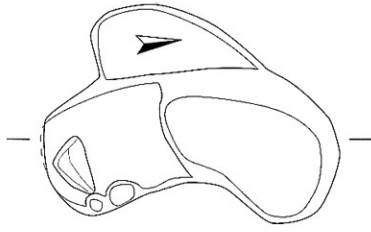
SP 175 (第 10 図) 調査区上段中央で確認された。SB1 の埋土を切る。やや歪んだ円形で、直径 61cm、深さ 28cm を測る。断面はフラスコ形を呈し、床面径は 70cm を測る。埋土は褐色土で炭化物を多く含んでいた。小型の貯蔵穴の可能性はある。遺物は弥生土器甕が出土した。

出土遺物

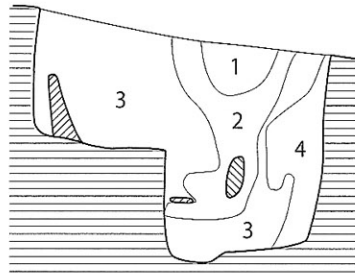
弥生土器

甕 (第 11 図 図版 8) 32 は底部の破片で、残存器高 5.1cm、復元底径 6.4cm を測る。平底で、体部は直線的に外上方に立ち上がる。調整は摩耗により不明である。胎土は 2mm 以下の白色砂粒を含み、やや粗い。焼成は良好で、内面は赤橙色～にぶい黄橙色、外面は橙色を呈す。

SK1

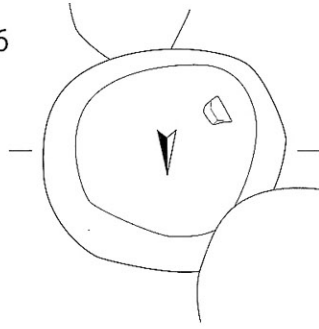


LH=28.20m

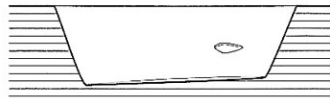


- 1.黒褐色土(炭化物多く含む)
- 2.黒色土(炭化物)
- 3.暗褐灰色土(炭化物含む)
- 4.褐灰色土

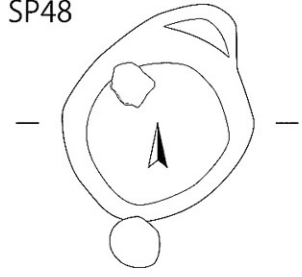
SP16



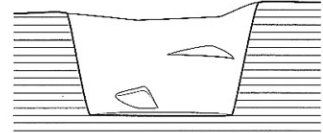
LH=28.00m



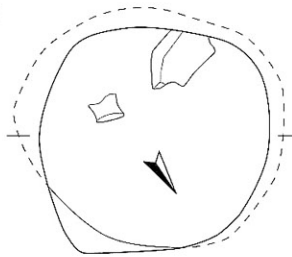
SP48



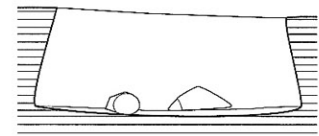
LH=27.80m



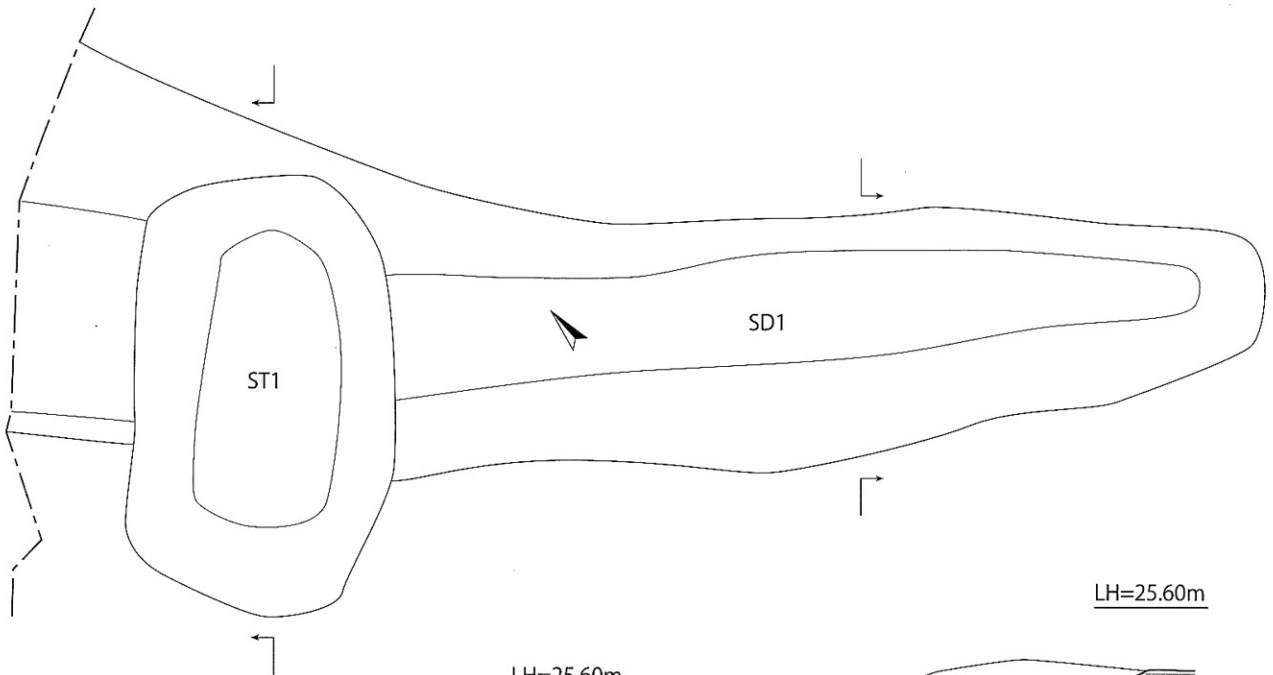
SP175



LH=28.00m

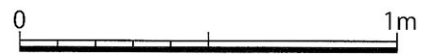
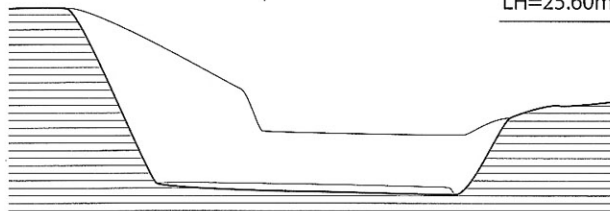


ST1・SD1



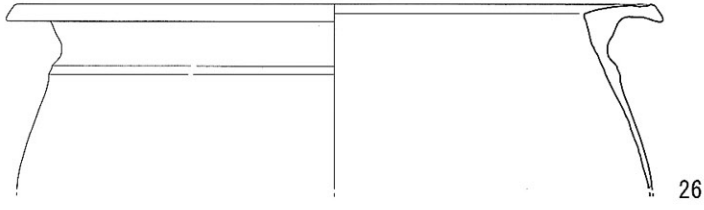
LH=25.60m

LH=25.60m

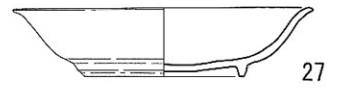


第 10 図 SK・ST・SD・SP 実測図 (S=1/20)

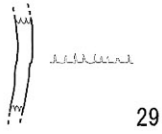
SK1



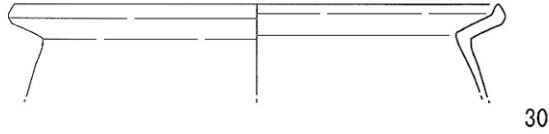
ST1



SP48



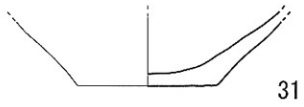
SP107



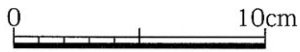
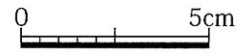
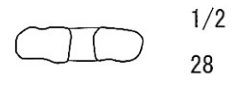
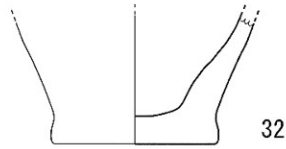
SP16



SP107



SP175



第 11 図 SK・ST・SP 出土遺物実測図 (S=1/2・1/3)

第Ⅲ章 総括

1. 遺構と時期

今回の調査では竪穴住居 4 棟、土坑墓 1 基、溝 3 条、柱穴 291 基を確認した。現況ですでに段々畑になっており、遺構の残存状況は不良である。まずは各遺構の時期を考えていきたい。

竪穴住居 (SB)

SB1 は長軸径 4.5 m の楕円形で、中央に屋内土坑とその脇に接して支柱穴がある。松菊里系の住居の特徴がみられる。出土遺物は時期を特定するまでの残存状況にない。特徴と出土遺物を加味したうえで時期を判断すると弥生時代中期頃と考えられる。

SB2 は全体の 1/4 程しか調査していないが、直径 10.4m 程の円形で、支柱穴は 8 本と考えられる。南側にはベット状の段があり、壁溝が廻る。SB3 により切られるため床面の状態は不明である。出土遺物は弥生土器の逆 L 字口縁や鋤先口縁の甕、円形浮文のある壺、丹塗りの鉢などが出土している。時期は弥生時代中期後半と考えられる。

SB3 は全体の 1/2 程しか調査していないが、長軸 4.85m、短軸 $2.4 + \alpha$ m を測る方形竪穴住居である。南辺中央にカマド状の遺構あるが、被熱による赤変は確認できず、周辺埋土からの炭化物も確認されなかったのでカマドとの認定は避けたい。支柱穴は 4 本と考えられる。遺物は布留系の土師器甕が出土した。時期は古墳時代前期と考えられる。

SB4 は全体の 1/2 程しか調査していないが、長軸 $4.44 + \alpha$ m、短軸 $2.6 + \alpha$ m を測る方形竪穴住居である。支柱穴は 4 本と考えられる。南側と西側にはベットがある。また、床面には南北方向の溝状遺構が確認されている。遺物は弥生土器、土師器が出土している。時期は判定する根拠に乏しいが、SB3 と同じ古墳時代前期と考えられる。

土坑 (SK)

SK1 は長軸 0.79 m、短軸 0.3 m、深さ 0.66 m である。埋土には炭化物が多く含まれ、壁は熱により赤変している。礫もいくつか確認され、焼土坑であろうか。遺物は弥生土器が出土した。時期は弥生時代中期後半と考えられる。

土坑墓 (ST)

ST1 は上面で長軸 1.17 m、短軸 0.68 m、深さ 0.49 m を測る。SD1 を切るかたちで検出された。埋土中位で白磁皿が出土した。時期は近世と考えられるが詳細は不明である。

溝 (SD)

SD1 は、残存長 3.28 m、幅 0.74m、深さ 5cm である。SD1 の終端東側にある攪乱部にある溝もこの続きと考えられる。遺物は弥生土器が出土した。時期は弥生時代中期以降と考えられる。

柱穴 (SP)

総数で 291 基確認された。大きさや深さは様々である。小型の貯蔵穴ではないかと思われるもの (SP175) もあった。また、掘立柱建物については、柱穴群の検討をおこなったが確認できなかった。時期は弥生時代中期～古墳時代前期である。

2. 田久貴船前遺跡について

本遺跡の発掘調査は今回が初めてであるが、同一丘陵上では田久松ヶ浦遺跡と曲香烟遺跡の2ヶ所を調査している。時期は弥生時代前期で、集落跡と墳墓群が確認されている。今回の調査地点は、これらの遺跡の展開する大きな丘陵の先端の標高 30 m 付近に位置し、釣川に沿って広がっていたであろう水田地帯を見渡す絶好の場所に立地している。市内のこの標高付近には光岡長尾遺跡、朝町竹重遺跡、富地原梅木遺跡などの多くの弥生時代中期～後期の遺跡が分布している。また、調査地点の東側にある小谷を挟んだ所には、古い前方後円墳である田久貴船前 1 号墳がある。未調査であるため詳細は不明だが現況で全長 50m 前後を測り、狭長な前方部が特徴である。後円部頂付近に陥没があり盗掘にあっていると考えられる。この他にも前方後円墳 1 基、円墳 4 基が展開している。

今回調査により弥生時代中期の住居が発見され、釣川沿いに展開する弥生時代の集落に新しいデータを加えることができた。また、背後に展開する古墳群に伴うものと考えられる住居も発見された。集落の開始時期は、柱穴より板付Ⅱ式の甕が出土しており、この型式よりも古いものは表採遺物からも見つかっていない。よって弥生時代中期初頭頃と考えられる。SB1 はこの時期に近いものと考えてよいであろう。その後、集落は古墳時代前期頃まで断続的に継続し、一時生活の痕跡がなくなる。次に痕跡が現れるのは、ST1 の近世になってからである。

本遺跡の集落の展開は、地形の制約により丘陵先端の斜面に貼りつくように広がっていたと考えられる。このような狭い空間にも集落が展開しているのが確認できたことは、周辺の調査時に良い参考になるであろう。調査地点より西側はやや広い緩斜面となっているので、集落の中心はこちらになることも予想される。ただし、今回の調査地点より釣川側になる北側は急斜面になる上に、既に宅地造成されており遺構の残存についてはきびしいであろう。

参考文献

- 宗像市史編纂委員会 1997 『宗像市史』 通史編第一巻 自然 考古
- 竹内理三ほか編 1988 『角川日本地名大辞典』 40 福岡県
- 宗像市教育委員会 1984 『宗像 埋蔵文化財発掘調査概報 -1983 年度 -』
宗像市文化財調査報告書 第 7 集
- 宗像市教育委員会 1988 『久原遺跡』 宗像市文化財調査報告書 第 19 集
- 宗像市教育委員会 1999 『田久松ヶ浦』 宗像市文化財調査報告書 第 47 集
- 宗像市教育委員会 2009 『概報 田熊石畑遺跡』 宗像市文化財調査報告書 第 61 集
- 宗像市教育委員会 2011 『宗像市遺跡等分布地図』
- 九州古墳時代研究会 2011 『宗像地域の古墳』 第 37 回九州古墳時代研究会資料集
- 花田勝広 2004 『倭政権と古代の宗像』

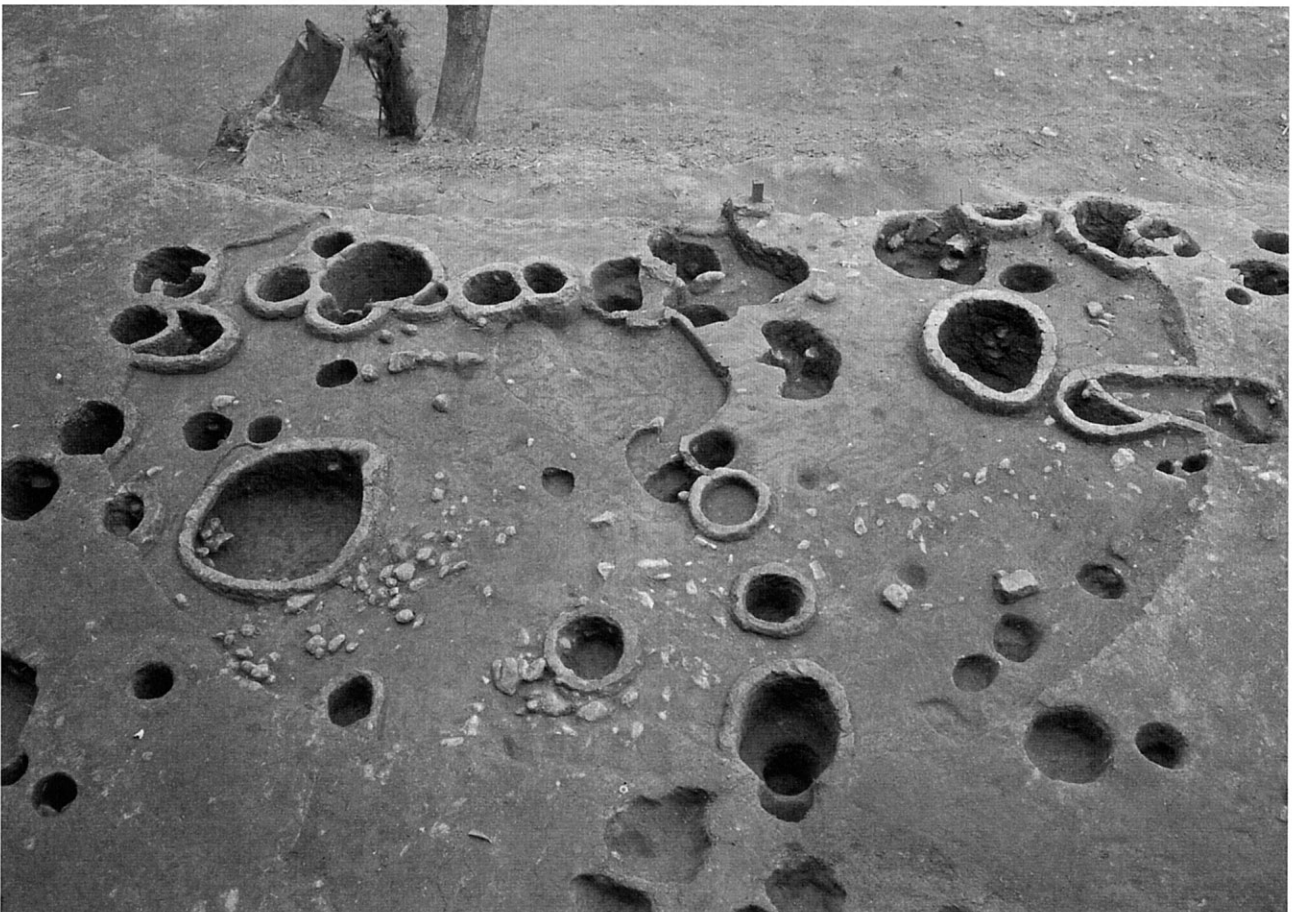
写真図版



調査区遠景（西上空から）



調査区全景（北から）



SB1 完掘（南から）



SB2・3 完掘 (南から)



SB4 完掘 (北から)

図版 4



SB2・3 南北土層観察 (東から)



SB2・3 北側切り合い部分 (南から)



SB2・3 西側切り合い部分 (東から)



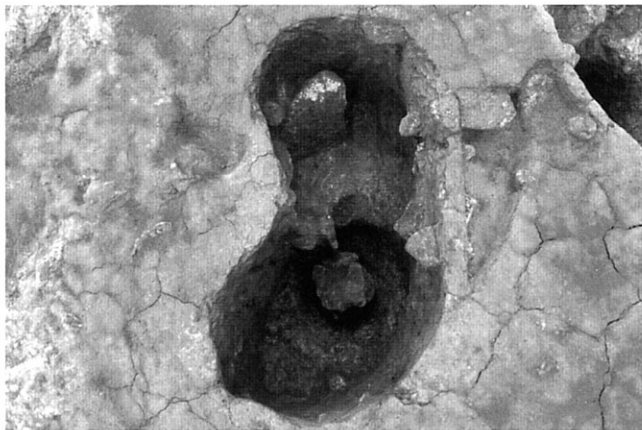
SB3 完掘詳細 (東から)



SB3 完掘詳細 (南から)



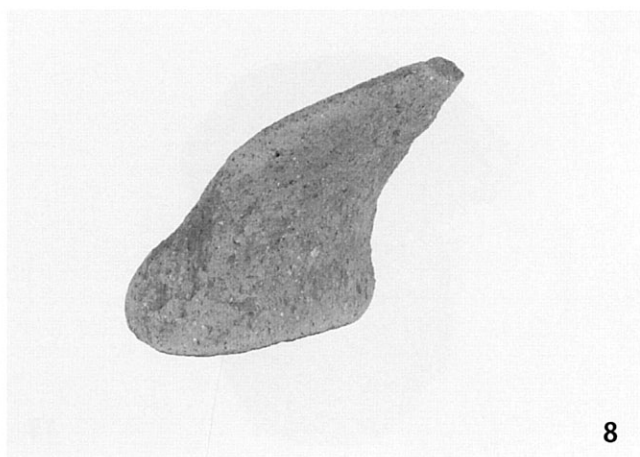
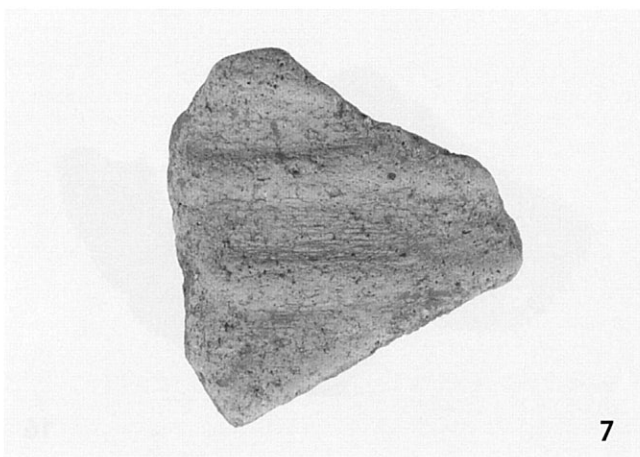
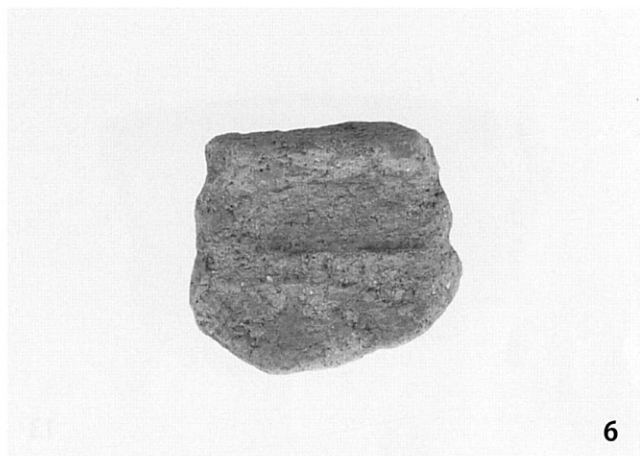
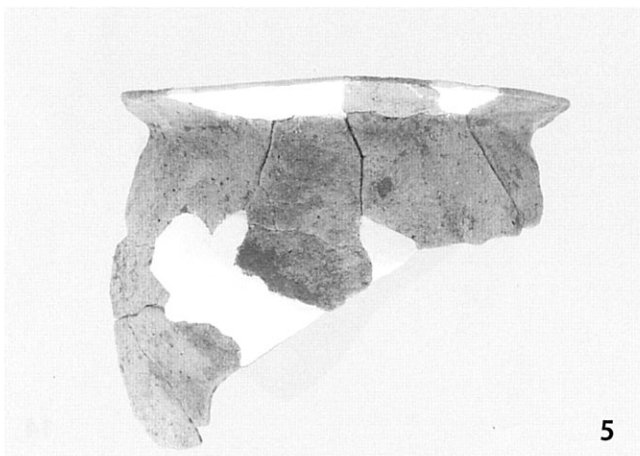
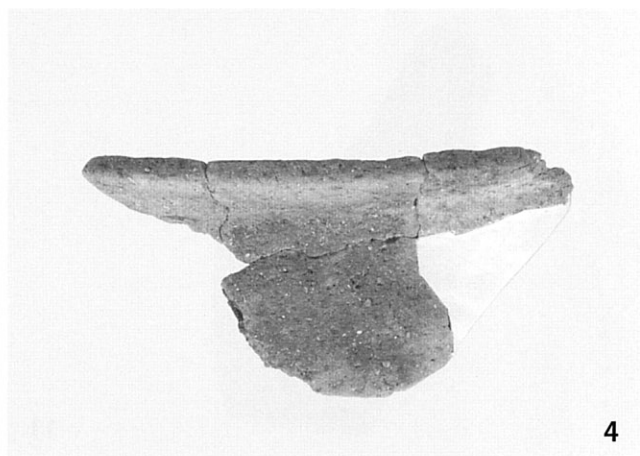
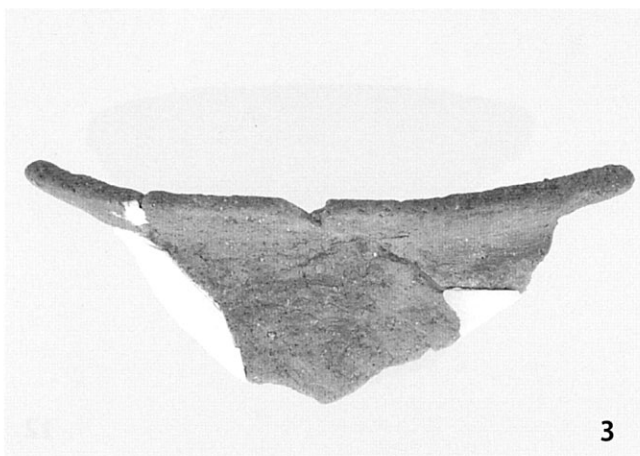
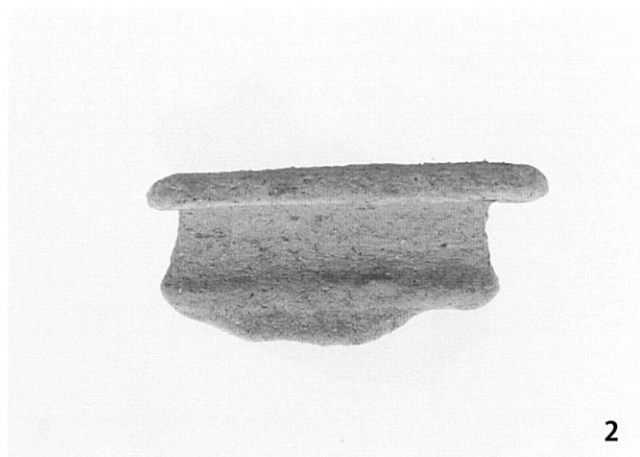
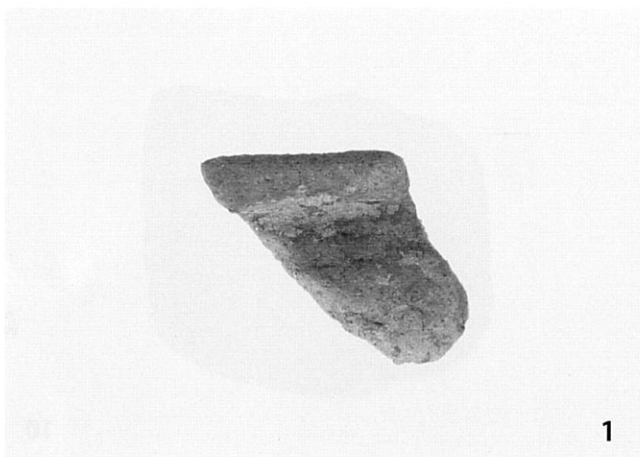
SB4 完掘詳細 (南から)



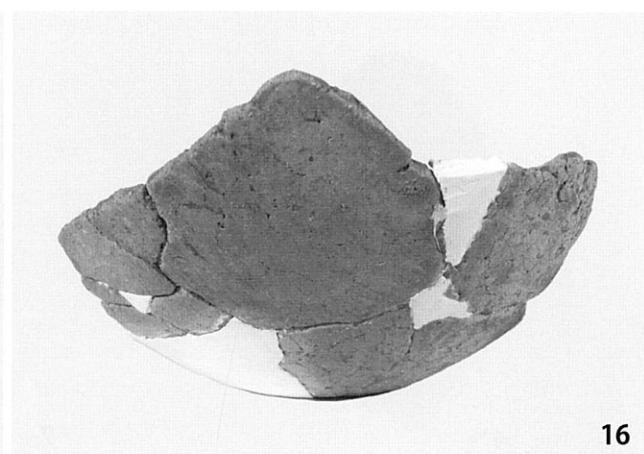
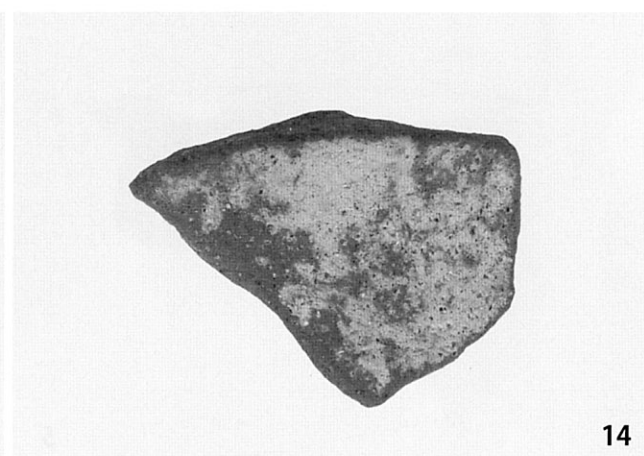
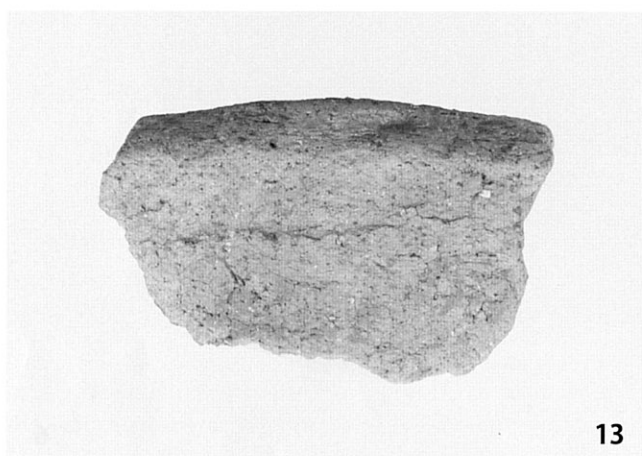
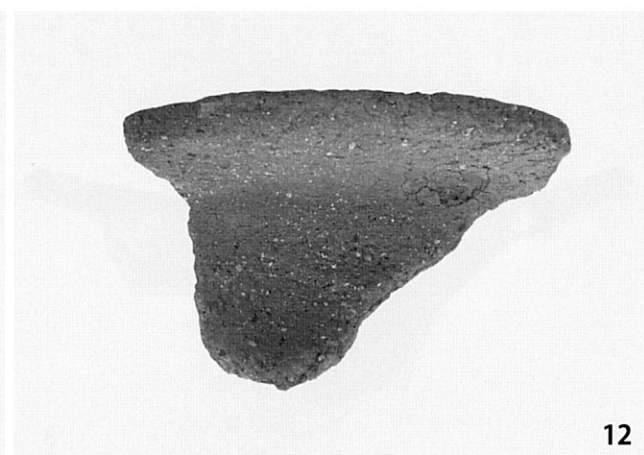
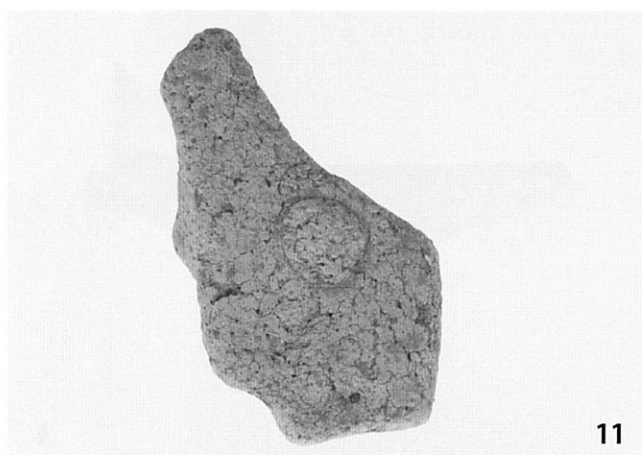
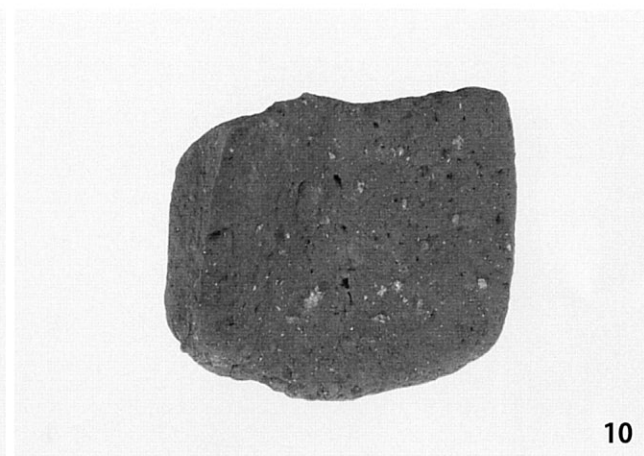
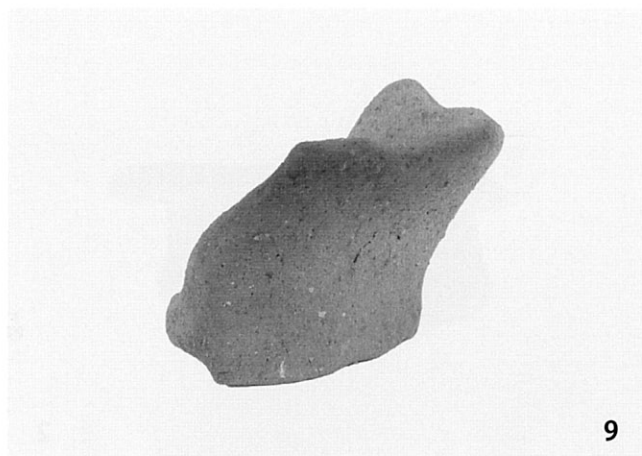
SK1 完掘 (北から)

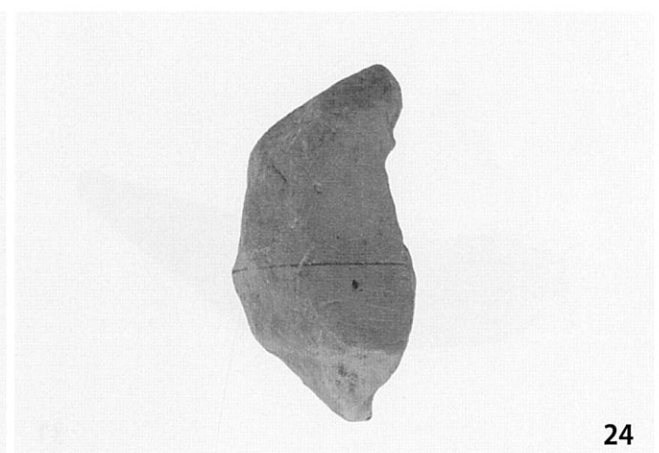
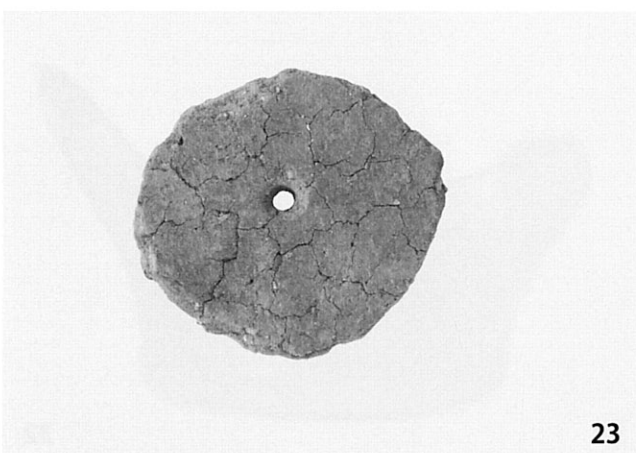
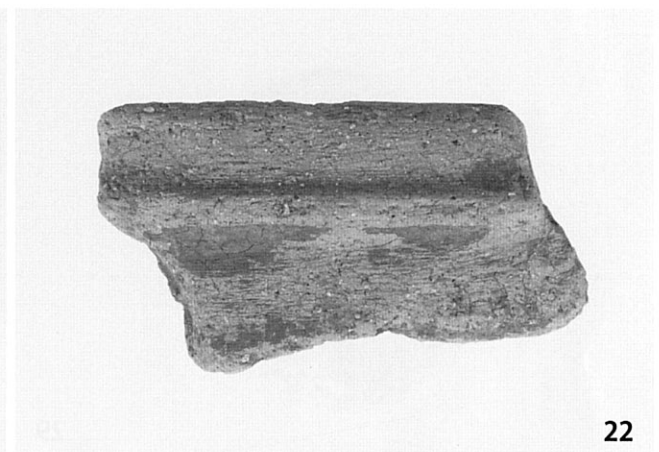
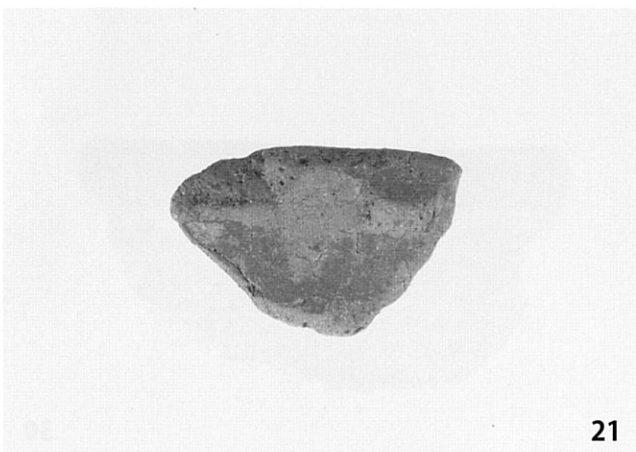
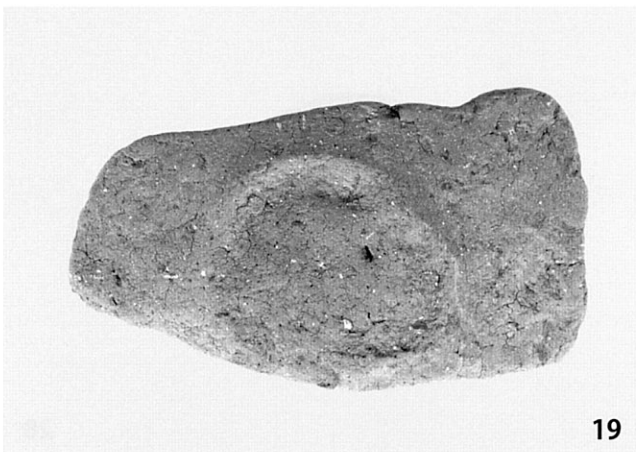
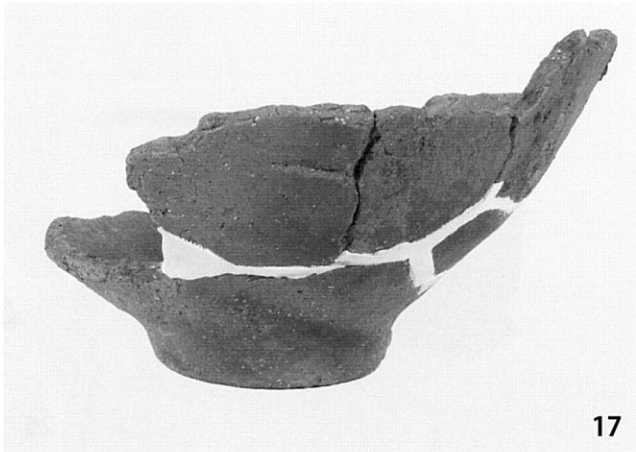


ST1・SD1 完掘 (北から)

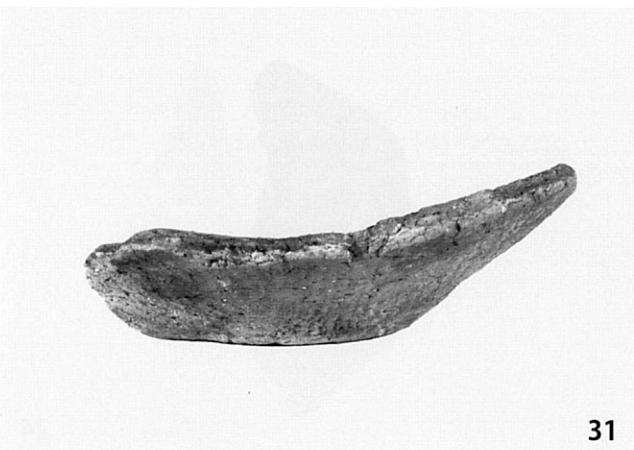
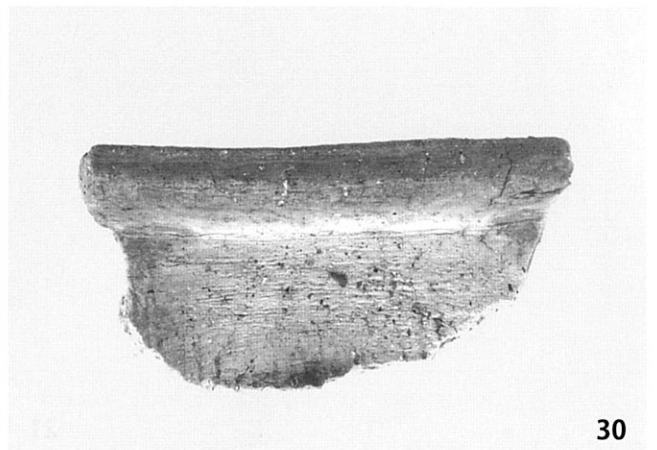
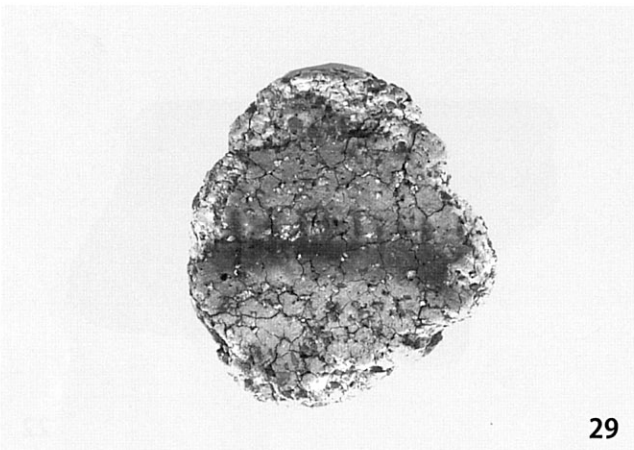
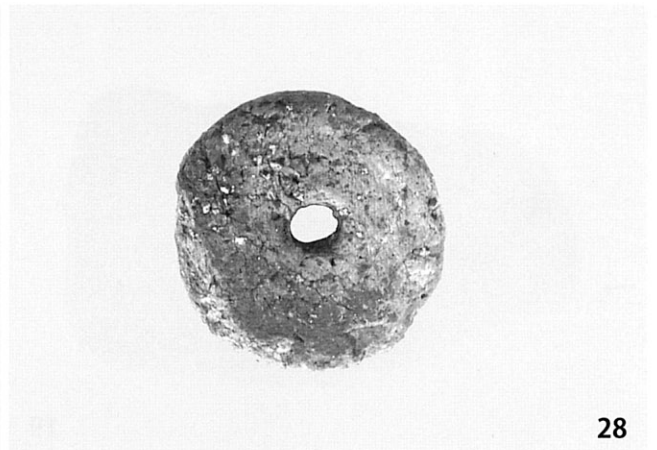
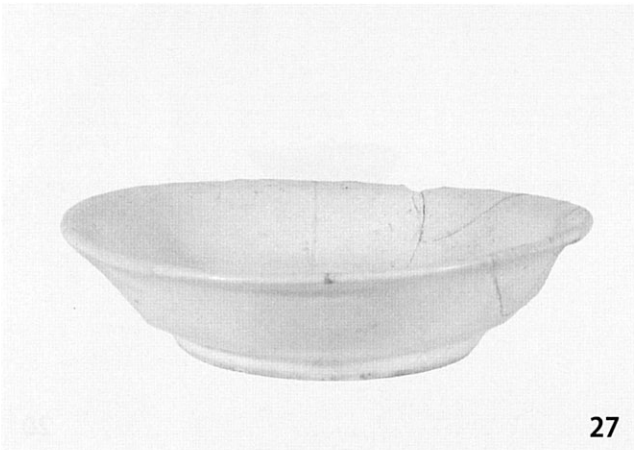
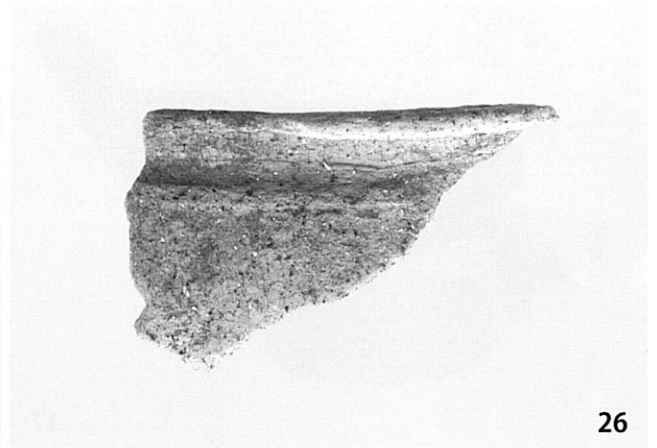
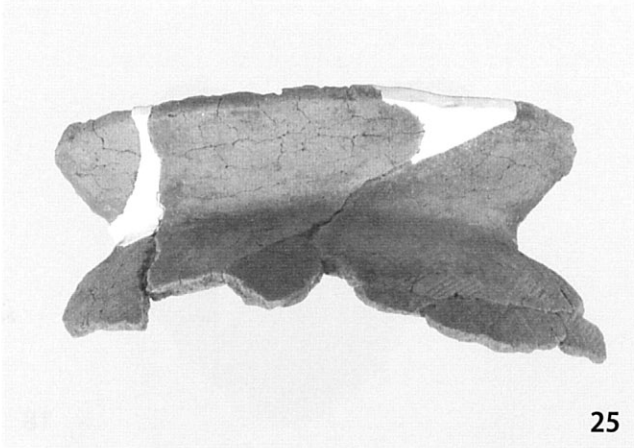


SB2 出土遺物 (1 ~ 8)





図版 8



SB3・SK1・ST1・SP16・SP48・SP107・SP175 出土遺物 (25～32)

報告書抄録

ふりがな	たくきぶねまえいせき							
書名	田久貴船前遺跡							
副書名	- 福岡県宗像市田久所在遺跡の発掘調査報告 -							
シリーズ名	宗像市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第67集							
編著者名	坂本雄介							
編集機関	宗像市教育委員会							
所在地	〒811-3492 福岡県宗像市東郷一丁目1番1号 〒811-3504 福岡県宗像市深田588 (海の道 むなかた館) TEL (0940) 62-2600 FAX (0940) 62-2601							
発行年月日	西暦2013年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たくきぶねまえいせき 田久貴船前遺跡	むなかたしたく 宗像市田久1310 1313	40220	00334	33° 47' 59"	130° 34' 10"	2010.06.09 ～ 2010.08.18	324m ²	個人農地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
田久貴船前遺跡	集落跡	弥生時代～ 古墳時代	竪穴住居 土坑	弥生土器・土師器・石器				
要約	<p>本遺跡は、摩山から北西にのびる丘陵先端の東側斜面に位置し、北側に釣川をはさんで四塚をのぞむ。</p> <p>本調査地は北東に向かい傾斜し、原地形を削平した2段の段丘状になっている。このため調査区は南北で上下2段にわたっている。また、畑地として耕作・利用された後、調査時まで放置されていた。南側は田久貴船前古墳が所在する丘陵に隣接している。全体で確認された遺構は、竪穴住居4棟、土壇墓1基、溝3条、柱穴291基である。南側上段は住居1棟に柱穴が多数、北側下段は住居3棟に土坑墓1基、溝状遺構3条、柱穴は少数である。出土遺物は、弥生土器壺・甕・高坏、土師器、陶磁器、石器などである。</p> <p>集落の時期は弥生時代中期初頭～古墳時代前期頃である。</p>							

田久貴船前遺跡

- 福岡県宗像市田久所在遺跡の発掘調査報告 -

宗像市文化財調査報告書

第67集

平成25年3月31日

発行 宗像市教育委員会
宗像市東郷1丁目1番1号

印刷 株式会社インテックス福岡
福岡市東那珂1丁目15番1号